

第104回 品質管理シンポジウム



開催期日：2017年6月1日(木)～3日(土)

会場：オークラアクトシティホテル浜松

主催：一般財団法人 日本科学技術連盟

後援：一般社団法人 日本品質管理学会

変化に対応できる、
変化を生み出せる
組織能力の獲得

—TQMの実践と品質賞への挑戦を通じた
成功例をもとに現状を検証する—



趣 旨



中條 武志 氏

中央大学 教授

第104回品質管理シンポジウム
主担当組織委員

今日、組織を取り巻く経営環境は大きく変化しています。このため、組織がその使命を着実に果たし続けるには、変化を的確に捉まえ、自組織の置かれた状況や自組織の強みに応じた経営目標・戦略を定め、その実現に向けて従来の仕事のやり方を変えていくことが必要になります。しかし、考え方や価値観の異なる多くの人から成る組織では、お互いに連携することが難しく、従来の延長線上からなかなか抜け出せません。

このような状況を打開するための一つの方法論が TQM (Total Quality Management、総合的品質管理) です。TQM は、1960 ～ 1970 年代の日本において、欧米から導入された QC (Quality Control、品質管理) の考え方・方法を実践する中から生み出されたもので、多くの組織がこれを活用することで世界的な競争力を持つ組織へと発展していきました。現在では、日本だけでなく世界中で、製造業だけでなくレストランやホテルなどのサービス業、スーパーなどの小売業、さらにはエネルギー、通信、運輸、医療、福祉、教育、金融などのあらゆる分野で活用され、効果をあげています。

しかし、日本の組織の現状を見ると、世代交代に伴って、TQM の本質を理解しないまま部分的な取り組みを続けたり、経営環境の変化や自組織の実情を踏まえた独自の工夫が不足していたりなど、多くの問題が見られるようになります。

した。このため、十分な成果を得ることができず、TQM に対する熱意を失っているところも少なくありません。事業のグローバル化が進み、物とサービスを一体化した価値の提供が求められ、情報技術の革新によって新しいビジネスの可能性が広がっているにもかかわらず、部門間・組織間のより密接な連携やより多くの人を巻き込んだ活動の実践を支えるための組織能力の低下が懸念されています。

他方、デミング賞・デミング賞大賞などの品質賞を受賞している組織を見ると、経営環境の変化や自組織の強みを踏まえた挑戦的な経営目標・戦略を定め、従来の枠を超えたより広い範囲の、より深い TQM 活動に全員で取り組み、その過程を通して、変化に対応できる・変化を生み出せる組織能力の獲得と、経営目標・戦略の達成を、同時に実現しています。

本シンポジウムでは、デミング賞・デミング賞大賞を受賞した組織の実践例を試金石にして、各組織で行われている TQM 活動の現状を検証したいと思います。組織の置かれている経営環境が大きく変化中、持続的な成功のためには、どのような組織能力が求められるのか、変化に対応できる・変化を生み出せる組織能力の獲得のために TQM は十分役立っているのか、より有効な経営ツールとして機能させるためにはどのような実践が求められるのか、などについて議論したいと思います。

プログラム

開催期日：2017年6月1日(木)～3日(土)

会 場：オークラアクトシティホテル浜松

月 日	時 間	科 目	講 演 者
6/1 (木)	19:30～20:40	<特別講演> 「富士重工業における経営革新 一脱・常識経営と科学的経営」(仮題)	吉永 泰之 氏 (株)SUBARU 代表取締役社長 (2017年4月1日 富士重工業(株)から社名を変更)
	20:40～21:00	質疑・応答	
	21:00～22:00	グループ討論メンバー自己紹介	
	22:00～23:00	談話室(参加自由)	
6/2 (金)	8:30～8:40	主催者挨拶	(一財)日本科学技術連盟 理事長 佐々木 真一
	8:40～9:20	<基調講演> 「TQMの実践と品質賞への挑戦を通して、変化に対応できる、変化を生み出せる組織能力の獲得」	中條 武志 氏 中央大学 教授 ※104QCS主担当組織委員
	9:20～10:30	<講演1> 「経営環境変化へ柔軟に対応するために必要な組織能力の獲得とTQM」	砂川 博明 氏 (株)キャタラー 代表取締役社長
	10:30～10:40	質疑・応答	
	10:40～11:00	休憩	
	11:00～12:10	<講演2> 「顧客の信頼を勝ち取るために必要な組織能力の獲得とTQM」	長谷川 裕恭 氏 (株)メイドー 代表取締役社長
	12:10～12:20	質疑・応答	
	12:20～13:10	昼食・休憩	
	13:10～14:20	<講演3> 「富士ゼロックスが目指す組織力強化と新たな価値提供への挑戦」	山本 忠人 氏 富士ゼロックス(株) 代表取締役会長
	14:20～14:30	質疑・応答	
	14:30～14:45	休憩	
	14:45～15:55	<講演4> 「株式会社ジーシーのGQM (GC's Quality Management) ～グローバル展開に求められる企業体質の強化を目指して～」	中尾 真 氏 (株)ジーシー 取締役会長
	15:55～16:05	質疑・応答	
	16:05～16:15	グループ討論の主旨説明	中條 武志氏
	16:15～17:50	グループ討論(1)	
	18:00～19:00	夕食(立食)	
	19:10～21:00	グループ討論(2)	
	21:00～23:00	談話室(参加自由)	
6/3 (土)	8:30～9:45	グループ討論報告(10分×7班※予備5分)	司会：中條 武志 氏 報告：各班リーダー
	9:45～10:00	休憩	
	10:00～11:30	総合討論	
	11:30～11:40	第104回 品質管理シンポジウム まとめ	中條 武志 氏
	11:40～11:50	次回(105回)品質管理シンポジウム案内	大橋 徹二 氏 (株)小松製作所 代表取締役社長(兼) CEO 105QCS主担当組織委員
	11:50～	昼食・解散	

※テーマおよびプログラムは、変更になる場合があります。

第104回 品質管理シンポジウム 講演概要

6/1 (木) 特別講演

富士重工業における経営革新 —脱・常識経営と科学的経営— (仮題)

吉永 泰之氏 (株)SUBARU 代表取締役社長
(2017年4月1日 富士重工業(株)から社名を変更)



大幅な赤字を抱えた低迷期を脱し、弊社は現在、順調に成長を続けている。その原動力は、創業のDNAである安全へのこだわりを個性と認めたブランド戦略や各種改革にある。

SUBARUの「お客様第一」を基軸とした事業戦略と人づくり、品質に対する強い想い。

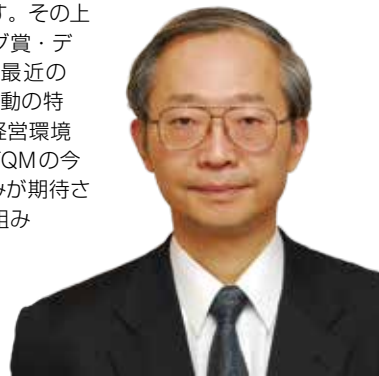
脱・常識経営と科学的経営に挑んだ弊社の経営革新についてお話しさせていただきます。

6/2 (金) 基調講演

TQMの実践と品質賞への挑戦を通した、変化に対応できる、変化を生み出せる組織能力の獲得

中條 武志氏 中央大学 教授

TQMとは何か、その柱となる考え方・活動を整理した上で、変化に対応できる・変化を生み出せる組織能力を獲得する上で果たす役割について概括します。その上で、品質賞の一つであるデミング賞・デミング賞大賞に焦点を当て、最近の受賞組織が実践しているTQM活動の特徴について概説します。また、経営環境の変化が激しい現在において、TQMの今後の実践としてさらなる取り組みが期待されることは何か、これらの取り組みを進める上で経営層、管理者、推進部門が果たすべき役割は何かについて問題提起します。



6/2 (金) 講演 1

経営環境変化へ柔軟に対応するために必要な組織能力の獲得とTQM

砂川 博明氏 (株)キャタラー 代表取締役社長



経済危機・東日本大震災など、キャタラーは様々な課題に直面し、これまでは後追いで対応してきました。この先10年もキャタラーを取り巻く環境は、決して平坦なものではないと予想されます。このような背景から、キャタラーは環境変化に強い経営体質へ進化するため、自工程完結の考え方をすべての業務プロセスに織り込み、環境変化へのダメージを最小限にする取組みを展開しています。また、不具合発生時には真因追求と徹底的な再発防止に取組み、10年、20年後も再発しない仕組みづくりを実践しています。当講演では、キャタラーの自工程完結を通じた経営品質向上への取組みとビジョン実現を目指した組織能力獲得や人材育成についてご紹介いたします。

6/2 (金) 講演 2

顧客の信頼を勝ち取るために必要な組織能力の獲得とTQM

長谷川 裕恭氏 (株)メイドー 代表取締役社長

当社は高強度ボルトを主要製品とする従業員1,000人の自動車部品メーカーです。2008年の世界金融不況以降、①人材育成、②管理のしくみ強化、③従来からの改善活動の打破、④業界No.1達成の戦略構築という4つの課題解決に向けて、TQM活動を強化・展開してきました。その活動プロセスと効果が評価され、2010年デミング賞実施賞を、2013年デミング賞大賞を受賞することができました。これは、顧客の信頼を勝ち取るために必要な組織能力を獲得できた結果であるとも思っています。その活動プロセスを紹介します。



6/2 (金) 講演 3

富士ゼロックスが目指す組織力強化と新たな価値提供への挑戦

山本 忠人氏 富士ゼロックス(株) 代表取締役会長

富士ゼロックスは、複写機からソリューション&サービスへの事業構造転換を進めてきました。グローバルな情報化社会が進展する中で、お客様の課題は、オフィスの課題から経営課題・社会課題へと変化しており、変化に対応できる企業であり続けることが求められています。本講演では、当社の事業構造転換を進めるエンジンとなった、メーカー体質強化を通じた新たな価値づくり、CSを軸とした方針展開、「言行一致」という全社活動による企業力の強化、従業員の成長、お客様への価値提供の実現についてご紹介いたします。



6/2 (金) 講演 4

株式会社ジーシーのGQM (GC's Quality Management)

～グローバル展開に求められる企業体質の強化を目指して～

中尾 眞氏 (株)ジーシー 取締役会長

当社は「歯科医療」に携わる企業として、GQM (GC's Quality Management) を経営ツールの核とし、Vision経営の推進に取り組んでおります。創業100周年の2021年をターゲットに「Vision 2021:健康長寿社会に貢献する世界一の歯科企業への挑戦」を掲げ、海外展開を加速し、地域毎に異なるお客様ニーズへの迅速な対応をねらいとして、2013年にスイスに海外統括会社を設立、海外を含むグループ全体でのデミング賞挑戦、欧州品質管理財団エクセレンスモデルの推進を図ってきました。又、企業価値の共有をねらいとし「ジーシーのこころ」を発刊、その浸透によりなかま(社員)一人一人が社は「施無畏(せむい)」の実践者としての考え・行動を身につける為の人材育成強化に取り組んでいます。本講演では、「生きる力を支える」歯科企業としてのあるべき姿を目指す当社の取り組みについてご紹介いたします。



グループ討論

テーマ・趣旨・論点

第1班

「変化に迅速に対応するための機動的な経営と方針管理」

■リーダー：安藤 之裕（（一財）日本科学技術連盟 嘱託）・井手 信（㈱キャタラー 執行役員 品質保証本部 本部長）

趣旨 経営環境の変化に迅速に対応するためには機動的な経営を実践できることが求められます。TQMでは機動的な経営を実現する方法として、日常管理、機能別管理などの基盤の上に行われる「方針管理」があります。機動的な経営のためにはどのような組織能力が必要なのか、そのような組織能力を獲得する上で「方針管理」は役立っているのか、どのような問題点・悩みがあり、どのような改善・実践が求められるのかを議論します。

論点

- ①変化し続ける経営環境に迅速に対応するためには、どのような組織能力が必要か。
- ②そのような組織能力の獲得に向けて、方針管理は十分役立っているのか、運営・活用上どのような問題点・難しさがあるか。
- ③方針管理をより有効なツールとして機能させるためには、どのような実践が求められるのか。

第2班

「新たな顧客価値の創造と部門間・組織間の横断的な連携」

■リーダー：西 敏明（岡山商科大学 経営学部 経営学科 教授）・高尾 秀男（㈱セキソー 常務取締役）

趣旨 社会が発展・成熟するにつれて、顧客を含めた、複数の部門・組織の密接な連携による新たな顧客価値の創造を行うことが求められます。新たな顧客価値の創造を行う上でどのような組織能力が重要となってきたのか、そのような能力を獲得する上でTQM（機能別管理、新商品開発管理など）が役立っているのか、より役立つものにするためには現状をどのように変えていく必要があるのかを議論します。

論点

- ①顧客を含めた、複数の部門・組織の密接な連携による新たな顧客価値の創造を行える組織能力とは何か。
- ②そのような組織能力の獲得に向けて、TQM（機能別管理、新商品開発管理など）は十分役立っているのか、不十分な点はどこか。
- ③TQMをより有効な経営ツールとして機能させるためには、どのような実践が求められるのか。

第3班

「品質保証の高度化とプロセス保証・日常管理の徹底」

■リーダー：山田 秀（慶應義塾大学 理工学部 管理工学科 教授）・原田 直樹（㈱メイドー 執行役員 品質保証部 部長）

趣旨 安全・安心に対する顧客・社会の関心が高まるにつれて、より高度な品質保証が求められています。第3班では、このような品質保証の高度化への対応について、プロセスで品質を作り込むという着眼点から議論します。具体的には、より高度な品質保証の要求にうまく対応するための組織の能力、すなわち、どのような組織能力が重要となってきたのかを検討します。加えて、そのような能力を獲得する上でTQMが役立っているのか、より役立つものにするためには現状をどのように変えていく必要があるのかを議論します。

論点

- ①従来に比べて求められる品質保証がどのように高度化しているか、またうまく対応できていること、いないことは何か。このような変化に対応するために必要な組織能力は何か。
- ②そのような組織能力の獲得にむけ、プロセス保証、日常管理などの既存のTQMの枠組みは十分役立っているのか、また不十分な点はどこか。
- ③十分役立っている点・不十分な点を踏まえてTQMをより有効な経営ツールとして機能させるためには、どのような実践が求められるのか。

第4班

「部門・職種の広がりや小集団改善活動の進化」

■リーダー：荒木 孝治（関西大学 商学部 教授）・鬼頭 靖（アイシン精機㈱ オールアイシンTQM推進センター センター長）

趣旨 世界の中で日本が果たさなければならぬ役割が変化するにつれて、市場調査・企画、設計・開発、営業・サービス、管理・間接など、従来とは異なった部門や職種において改善や管理を実践することが求められます。実践の範囲を広げていく上で、どのような組織能力が重要となってきたのか、そのような能力を獲得する上でTQM（QCサークル活動やチーム改善活動など）が役立っているのか、より役立つものにするためには現状をどのように変えていく必要があるのかを議論します。

論点

- ①市場調査・企画、設計・開発、営業・サービス、管理・間接など、従来とは異なった部門・職種において改善や管理を実践できる組織能力とは何か。
- ②そのような組織能力の獲得に向けて、TQM（QCサークル活動やチーム改善活動など）は十分役立っているのか、不十分な点はどこか。
- ③TQMをより有効な経営ツールとして機能させるためには、どのような実践が求められるのか。

第5班

「情報技術の革新と情報の分析・活用／知識の蓄積・活用」

■リーダー：渡辺 喜道（山梨大学 大学院総合研究部 准教授）・辻 裕里（サンデンホールディングス㈱ 執行役員 IT本部長）

趣旨 IoTなどの情報技術が進み、これらを活用した新たなビジネスの可能性や従来の枠を越えた生産性の向上に対する期待が高まるにつれて、多種多様な膨大な量の情報を分析・活用したり、次々に生まれてくる新たな知識を確実に蓄積・活用・管理したりすることが必要になっています。情報技術を活用して経営の革新を図る上でどのような組織能力が重要となってきたのか、そのような能力を獲得する上でTQMが役立っているのか、より役立つものにするためには現状をどのように変えていく必要があるのかを議論します。

論点

- ①IoTなどの情報技術の革新が進む中において、情報、特に品質に関連する情報の分析・活用・管理／知識の蓄積・活用・管理を着実にを行い、新たなビジネスや生産性の向上につなげられる組織能力とは何か。
- ②そのような組織能力の獲得に向けて、TQMは十分役立っているのか、不十分な点はどこか。
- ③TQMをより有効な経営ツールとして機能させるためには、どのような実践が求められるのか。

第6班

「グローバル化・事業領域の変化と人材育成」

■リーダー：永田 靖（早稲田大学 創造理工学部 経営システム工学科 教授）・宮野 玲衣（㈱ジーシー GQM推進室 室長）

趣旨 市場や事業拠点のグローバル化や事業領域の変化が急速に進む中、新たな事業部門、関係会社、海外現地法人を含め、そのための必要な人材を確実に確保・育成することが求められます。必要な人材を確実に確保・育成する上でどのような組織能力が重要となってきたのか、そのような能力を獲得する上でTQM（階層別分野別教育体系や品質マネジメント教育など）が役立っているのか、より役立つものにするためには現状をどのように変えていく必要があるのかを議論します。

論点

- ①市場や事業拠点のグローバル化や事業領域の変化が急速に進む中、そのための必要な人材を確実に確保・育成することのできる組織能力とは何か。
- ②そのような組織能力の獲得に向けて、TQM（階層別分野別教育体系や品質マネジメント教育など）は十分役立っているのか、不十分な点はどこか。
- ③TQMをより有効な経営ツールとして機能させるためには、どのような実践が求められるのか。

第7班

「地域・社会との共生とTQMの普及・推進」

■リーダー：高橋 勝彦（広島大学 大学院工学研究院 教授）・中村 聡（トヨタ自動車九州㈱ TQM推進室長）

趣旨 地域・社会の中で組織が果たす役割が大きくなるにつれて、求められる役割を果たせる組織能力、とりわけ経営資源が限られる中、互いに補完しあえる組織がそれぞれに持つ強みを活かして連携し、求められる価値を提供することにより、地域・社会との共生を図る組織能力が求められています。地域・社会との共生を図るためには、どのような組織能力が重要となってきたのか、そのような組織能力を獲得する上でTQMは役立っているのか、より役立つものにするためには現状をどのように変えていく必要があるのかについて議論します。

論点

- ①地域・社会との共生を図るため、互いに補完しあえる組織がそれぞれの持つ強みを活かし、求められる価値を提供できる組織能力とは何か。
- ②そのような組織能力の獲得に向けて、経営ツールとしてのTQMならびにその普及・推進の方法論は十分に役立っているのか、不十分な点はどこか。
- ③TQMをより有効なツールとして機能させるためには、どのような実践が求められるのか。

参加要領

開催日時 **2017年6月1日(木) 19:30 ~ 6月3日(土) 12:00**
(6月1日受付開始17:00~、夕食18:00~)

会 場 **オークラアクトシティホテル浜松**

〒430-7733 静岡県浜松市中区板屋町111-2
TEL: 053-459-0111 FAX: 053-458-3374

参加対象

企業の役員、上級管理職の方々

参加費

○一般

129,600円/1名(消費税込み)

○本シンポジウム賛助会員会社

トップ枠(会長・社長)、通常枠 各1名無料

3人目から43,200円/1名(消費税込み)

※トップ(会長・社長)が参加されない場合は、無料参加枠は通常枠1名のみとなります。

※食事代(6月1日夕、6月2日朝・昼・夕、6月3日朝・昼)は日科技連が負担いたします。尚、宿泊費、交通費はご負担ください。

■申込期日 第一次〆切を4月26日(水)とさせていただきます。



シンポジウム申込方法

QCS専用Webサイトからお申し込みください。

※Webサイトをリニューアルいたしました。

<http://www.juse.jp/qcs/>

申込フロー

QCSホームページへ
アクセス

メニューから
「参加要項」

ページ内
「お申込み」
ボタンをクリック

連絡担当者入力
参加者入力

確認画面

登録完了

最近の主な講演者

(組織名・役職は講演当時の表記になっております)



第103回
トヨタ自動車(株)
取締役社長
豊田 章男氏



第101回
TOTO(株)
代表取締役副社長執行役員
猿渡 辰彦氏



第101回
エリーパワー(株)
代表取締役社長
吉田 博一氏



第100回
トヨタ自動車(株)
名誉会長
豊田 章一郎氏



第99回
マツダ(株)
代表取締役 会長
金井 誠太氏



第97回
(株)ブリヂストン
相談役
荒川 昭四氏

品質管理シンポジウム組織委員

(五十音順、敬称略) ※◎は第104回品質管理シンポジウム主担当組織委員

(組織名・役職は2017年3月14日時点の表記になっております)



猪原 正守
大阪電気通信大学 教授



大橋 徹二
(株)小松製作所
代表取締役社長(兼)CEO



佐藤 和弘
トヨタ自動車(株) 常務役員



鈴木 和幸
電気通信大学名誉教授



田中 千秋
イノベーションオフィス田中(IOT)
代表



津田 純嗣
(株)安川電機
代表取締役会長



◎**中條 武志**
中央大学 教授

品質管理シンポジウム賛助会員にご入会ください!

品質管理シンポジウム(QCS)とは

- 品質経営を進めるうえで、経営陣には是非とも参画していただきたいシンポジウムです。
- 1965年の創設以来、**年2回(6月、12月)開催**しています。
- QCS独自の「**賛助会員制度**」により、趣旨にご賛同いただいている企業様から資金的なご協力のもと組織的、計画的な運用を行っています。
- 組織委員制度**(回ごとに主担当をおく)により、企画立案を行っています。
- 各回でテーマを決め、テーマにちなんだ**講演・グループ討論・総合討論**を実施しています。

品質管理シンポジウム、賛助会員入会のメリット・費用

- メリット1** 講演(トップランナー企業)から、TQMの推進・動機づけに役立つ情報が得られます。
- メリット2** グループ討論等で、他社の考え、推進事例等を議論し、課題解決への糸口を見つけられます。
- メリット3** 参加者同士のコミュニケーションを深める場を多く設定しており、品質経営推進企業幹部との人脈が形成されます。

入会費用▶1口につき年額**187,920円(消費税含む)**

入会いただきますと

●**無料参加枠2名(トップ枠・通常枠)を確保できます。**

- 無料参加枠以外の方は特別価格(43,200円)でご参加いただけます。
- 本シンポジウムの発表報文集・実施報告が無料で入手できます。

※日科技連賛助会員とは異なります。QCS独自の賛助会員制度です。
※ご入会は、随時受付けております。

品質管理シンポジウム 賛助会員会社

※2017年3月14日現在、50音順 102社

1 (株)アーレスティ	22 (株)小松製作所	41 ダイハツ工業(株)	61 長津工業(株)	82 (株)ブリヂストン
2 アイシン・エィ・ダブリュ(株)	23 サラヤ(株)	42 大豊精機(株)	62 新潟ダイヤモンド電子(株)	83 ペンてる(株)
3 アイシン精機(株)	24 澤藤電機(株)	43 ダイヤモンド電機(株)	63 日華化学(株)	84 (株)保志
4 愛知製鋼(株)	25 サンデンシステムエンジニアリング(株)	44 (株)竹中工務店	64 (株)日科技連出版社	85 本田技研工業(株)
5 アイホン(株)	26 サンデン物流(株)	45 (株)千代田グラビヤ	65 日産自動車(株)	86 前田建設工業(株)
6 (株)アドヴィックス	27 サンデンホールディングス(株)	46 テックスエンジニアソリューションズ(株)	66 日産車体(株)	87 (株)前田製作所
7 (株)イシダ	28 サンワテック(株)	47 (株)デンソー	67 日本電気(株)	88 マツダ(株)
8 NECフィールディング(株)	29 (株)GSユアサ	48 東芝機械(株)	68 (株)日本科学技術研修所	89 (株)マルヤスエンジニアリング
9 (株)MCシステムズ	30 (株)ジーシー	49 東レ(株)	69 日本特殊陶業(株)	90 丸和電子化学(株)
10 エリーパワー(株)	31 (株)ジーシーデンタルプロダクツ	50 TOTO(株)	70 パナソニック(株)	91 三島食品(株)
11 大塚化学(株)	32 (株)ジェイテクト	51 トクラス(株)	71 パナソニックヘルスケア(株)	92 (株)村田製作所
12 岡谷電機産業(株)	33 清水建設(株)	52 豊田合成(株)	72 パナック(株)	93 (株)メイドー
13 (株)オティックス	34 JUKI(株)	53 トヨタ自動車(株)	73 (株)羽生田製作所	94 名北工業(株)
14 オムロン(株)	35 シロキ工業(株)	54 トヨタ自動車九州(株)	74 パラマウントベッド(株)	95 (株)安川電機
15 鹿島建設(株)	36 住友理工(株)	55 トヨタ自動車東日本(株)	75 ビアメカニクス(株)	96 (株)ユニバンス
16 関西電力(株)	37 積水化学工業(株)	56 (株)豊田自動織機	76 日野自動車(株)	97 (株)リコー
17 (株)キャタラー	38 (株)セキソー	57 トヨタ車体(株)	77 ヒロセ電機(株)	98 リコーエレメックス(株)
18 光洋サーモシステム(株)	39 ソニーセミコンダクタソリューションズ(株)	58 豊田バンモップス(株)	78 富士ゼロックス(株)	99 リコーテクノロジーズ(株)
19 コーセル(株)	40 ダイキン工業(株)	59 トヨタ紡織(株)	79 富士電機(株)	100 (株)良品計画
20 小島プレス工業(株)		60 トヨタホーム(株)	80 フジミ工研(株)	101 ローム(株)
21 コニカミノルタ(株)			81 フタバ産業(株)	102 (株)ワークスアプリケーションズ

問い合わせ

一般財団法人日本科学技術連盟 品質管理シンポジウム担当(安随/池田/浜井)

〒166-0003 東京都杉並区高円寺南1-2-1

TEL: 03-5378-1215 FAX: 03-5378-9842

E-mail: tqmsemi@juse.or.jp